

第 21 回

世代を超えて未来を語る

今津 眞作 〔聞き手〕 澁澤

(元中央不動産特別顧問)

(コモンズ投信会長)

健

三十代はじめの病床で再会した俳句

感慨をお聞きしたいと思います。今津さんが『ほほづ そして『ほほづゑ』での文筆活動を通して、折々のお ご登場いただきました。その来し方や、ご自身の心情 澁澤 第五十三号からで、 セージも含めてお話を伺います。 でも人生においては大先輩であり、 の同人になられたのは二〇〇七年(平成十九年)、 今回の対談「博聞意伝」には、 私は五十号から同人に加わりまし 今津眞作さんに 次代へのメッ

たのですか。 おられます(『ほほづゑ』第五十三号 二〇〇七年)。 己紹介」欄に「俳句のことなど」という文章を寄せて から遡ること十年ですが、この頃は俳句を詠まれて 今津さんが同人になられた折に、「新同人登壇 今

書いていた方から俳句の季語の魅力を教えられ、俳句 俳句との最初の出会いは小学校の低学年の頃で、実家 ことを知らされました。 の季語というものがいかに美しい詞華であるかという いうものでした。その後、 しています。「何時となう日は暮れにけり花の中」と の墓碑に刻まれていた祖父の辞世の句だったかと記憶 その 「俳句のことなど」でも書いたことですが 父の友人で新聞小説などを

学生で、俳句を捻って過ごす時代ではなく、 月号)がもて囃されていましたが、当時私は法学部の 二芸術論―現代俳句について―」(『世界』一九四六年十一 ら生活のために生きる事で精一杯でした。社会に出 そして戦争を経て戦後になり、 桑原武夫の「俳句第 ひたす

> 栄一)に入りました。そして七年ほど経った頃でした ほどきを受けました。 三十七、八年頃でした。偶々同じ病棟に俳句の師匠 本経済新聞』などに投稿したりしていました。 からないだろう、ということで俳句を詠み始め、 ない、、十七文字に凝縮される俳句ならそう負担は掛 は時間のかかるもので、長時間根を詰めることは良く うか」と言ってくれました。当時結核の療養というの 碌なことを考えないだろうから、俳句でも始めてはど 支店の支店長が、「若い者が時間を持て余していると 院に三年ほど入院しました。その折、 てから私は昭和二十九年に第一銀行 入院されていて、 結核を患いました。なかなか治らず、結局慶応病 患者の中から五、六名が集まって手 私が勤めていた (初代頭取:渋沢 日

澁澤 とが出来たということですね。 れたことで、 三年間の療養というのは大変でしたが、 小学生の時に出会った俳句に取り組むこ

今津 そういうことですね。そして、ようやく退院す

使って投稿しました。 した。これには俳句ではなく自由詩を、ペンネームを私は全国銀行協会が発行する季刊雑誌に投稿していまることが出来て、また銀行勤めが始まったのですが、

うことだったのですか。 選擇 どうしてですか。実名だと差し障りがあるとい

られた、という風潮がありましたね。
なことは、文化的なことであっても売名行為として憚
はばか
当時は文章を書いて外部に投稿するというよう

澁澤 それで、どういうペンネームを使われたのです

笑っておられました。それは三十歳頃のことです。《誰だろうと思っていたのだが、お前だったのか、とね。入院中に俳句を詠むことを勧めてくれた支店長が、銀行の中では私だということは分かっていたようです。

られた東明雅先生(国文学者、俳人。後に信州大学で教また、私の中学時代の国語の先生で連句をやってお

いますが。
では奥さんと娘さんが連句をやっておられると伺って別していただいていました。先生は先年亡くなられて、四半期(三ヵ月)に一度、五十句ほどをお送りして添鞭を執られた)に、俳句の添削をしていただきました。

は詠まれるでしょうね。 今津 いいえ、熱心な人なら大学ノート一冊分くらい 澁澤 四半期に一度、五十句というのは多い方ですか。

ですか。
は句を詠まれるテーマはあったのようなものですか。
俳句を詠まれるテーマはあったのようなものですか。

題材になるということでしょうか。 詠みこむ必要はないんです。周りの自然一般の描写が詠みこむ必要はないんです。周りの自然一般の描写がはない。

ことを十七文字で表現するということですね。

造澤 折々の日常や、身の回りの自然について感じる

句というのは和歌(短歌)よりもかなり後にできたも今津(そうです。私の職場の先輩・上司からは、「俳

らにしても今はそういう拘わりごとは一切ありませんめにしても今はそういう拘わりごとは一切ありません想や信条を持ってなくても耽美写実でいけます。どち自身の心情を色濃く詠み込みますが、俳句は立派な思とよく言われました。和歌(短歌)を歴史的にもっと勉強してみろ」のだ。和歌(短歌)を歴史的にもっと勉強してみろ」

あったのですか。
**
**
なるほど、戦後においてもそういう風潮がまだ

社会人で、ある種傍観者の立場におりましたが。したから大変でしたね。もっともその頃は、私は既にしたから大変でしたね。もっともその頃は、私は既に

までも本業とは別の〝文芸〟です。後に二冊の詩句集に纏めて出版しました。これはあくまあ、そんなことをやりながら文筆を続けて、定年

~本業と文芸』 のはざまで

> ンス感覚ですね。 安保時代であっても、現在でも、なかなか難しいバラ

になりますか。 **冷津** *本業と文芸』と言われましたが、私の場合、 とちらも極めることにはなりませんでしたね(笑)。 とちらも極めることにはなりませんでしたね(笑)。

大津 現在のように雑文を書くようになったのは仕事大郎を退いて齢をとってからですが、毎朝の散歩のの一線を退いて齢をとってからですが、毎朝の散歩のあるというのではなく、ゆったりと思いめぐらし、目がなるというのではなく、ゆったりと思いる。

しておりますが、『ほほづゑ』での文筆のはじめに俳ることと、一緒に自由詩も寄せられていることは承知在『ほほづゑ』への特集寄稿をほぼ毎号執筆されてい今津さんの〝本業と文芸〟のうち、文芸の方は、現

めの方はどのような経緯を辿ったのですか。とを、改めて知りました。それで、、本業、の銀行勤句があり、それもかなり練られたものであるというこ

今津 私が大学を卒業して銀行勤めをすることになった時、私の親しかった友人からは、「お前には銀行勤た時、私の親しかった友人からは、「お前には銀行勤た時、私の親しかった友人からは、「お前には銀行勤ったじゃないか。銀行というのは毎日きちんと出勤してお客様に応対するんだよ」と言われました。「俺もそう思う。まず五年くらいやってみて、駄目ならば三十歳前に辞めて改めて考えるよ」と返しました。ところが先にお話したように胸を病んで長期療養をした。とのですから、銀行には大変お世話になり、したがって銀行を辞められなくなりました。

融資の仕事とか、銀行本来の審査担当をまかされていることもなく、支店にもあまり出ずに本部での勤務がることもなく、支店にもあまり出ずに本部での勤務がこのように、私の銀行での勤めは、身体を悪くした

楽しい思い出となりました。そうした中で、面識を得て厚誼たこともありました。そうした中で、面識を得て厚誼たこともありました。そうした中で、面識を得て厚誼たこともありました。そうした中で、面識を得て厚誼

今津 私が入った頃の銀行は、敗戦の余燼まだ消えない頃だったこともあって、まだ社内の福利・厚生などい頃だったこともあって、まだ社内の福利・厚生などい頃だったこともあって、まだ社内の福利・厚生などい頃だったうで、麦飯とうどんとパンが日替りで支給されて、バターとかおかずなどは各自持参していました。そういう時代でしたね。

五七年頃まで)と言われたのはこの頃で、私の担当は、した。神武景気(高度成長のはじまり。一九五四年から夜の十時前に退社することはほとんどありませんでその後復興とともに、どんどん忙しい時代になり、

中は沸いていました。工業都市、鉄鋼コンビナートの建設などで大きく世のりました。一方、この頃になると、大型列島改造とか、第二次産業中心で、中には会社更生法適用の会社もあ

澁澤 私の父は昭和四年生まれで、東京銀行に勤めていました。父の若い頃の、銀行勤めの頃のことを聞いいう問いに父は、、給料日にビフテキを食べることだ。と言っていました(笑)。つまり給料日に何をするのと言っていました(笑)。つまり給料日に何をするのと言っていました(笑)。つまり給料日に何をするのが楽しみだったかということですが、今津さんはいかがですか。

今津 私の場合、給料日を当て込んで何か楽しみを、 をいうことがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が ということがありませんでした。というのは、父親が

ったと記憶しますが。
れでも給料の遅配もなかったので、本ぐらいは少し買れでも給料の遅配もなかったので、本ぐらいは少し買ので、高価なものでした。当時の私の給料が二万円程しても当時はまだ保険制度が完備していませんでした

は何時ごろのことですか。 ご自分の生活に自由といいますか、余裕を持たれたのご自分の生活に自由といいますか、余裕を持たれたの後、

今津 その後、景気の上昇もあって、給料が三割も上がった年もありました。その時はさすがにホッとしまがった年もありました。その時はさすがにホッとしまがった年もありました。

運にありました。 しも日本経済全体も安定成長の機運に乗って上昇の気代でもありましたので家を建てることにしました。折ての家を持たねばならないと考え、丁度持家奨励の時ての家を持たねばならないと考え、丁度持家奨励の時

『論語と算盤』考え

良くやっていました。その頃彼はテニスやゴルフなど と出会いました。奥村さんとは大学の同窓で昔から仲 隣にいた旧友の奥村有敬さん(『ほほづゑ』のメンバー) めました。その後銀行に戻って、丸の内にあった旧第 今度は薬科大学に学部新設のため招かれて三年ほど勤 りついて銀行に帰り、そしてまたお呼びがかかって、 その対策支援のために八年いっていました。ひと区切 優良な上場会社だったのですが、企業買収事件に遭い 合でした。最初食用油の会社に三年出向したり、次に 年ほど出向して帰ってくると、また次に出向という具 に盛んに興じていましたが、特に語学が堪能でした。 一銀行の建物の管理会社に籍を移しました。その時近 そしてその後、 私は四十代から出向を繰り返していました。 銀行に勤められたのは何年頃までですか 一九八一年(昭和五十六年)までだったと思い 一度学校経営に携わった経験からで

勤め、 澁澤 進本部というところにも関わりましたが、 性を上げるためにしきりに尻を叩く、 要だということです。私も企業の生産性本部、能率推 して説いておられます。まさにこのバランスこそが肝 における利益追求を「算盤」、仁義道徳を「論語」、と う哲学「士魂商才」を記しています。この〝ビジネス 盤』の中で、「企業の利潤と道徳を調和させる」とい れを基に、第一銀行を設立した渋沢栄一は『論語と算 理に関する教訓、政治論などが収められています。こ 孔子の言行記録ですが、処世の道理、 語』というのは、孔子没後に門人によって纏められた ね。つまり、『論語』を読んでいないからですよ(笑)。『論 起こるのか、このことはどのように考えられますか。 しょう、再び総合大学の経営に呼ばれました。二年程 不祥事が伝えられています。こうしたことはなにゆえ これは、詰まるところ、企業の倫理の問題です 理事長の病気退任とともに私も退任しました。 最近、銀行に限らず、 名門の歴史ある大企業の かたや

「仁義道 国家・社会の倫 つまり生産

しょうね。 伸びる〟というように是認してしまう、ということでものです。トップも〝あいつにやらせておけば成績もいう集団の中には必ずそういう性急な意見が出てくる徳〞が欠落してしまうということでしょうね。企業と

今津 企業ですから生産性・ノルマを追求するのは当今津 企業ですから生産性・ノルマを追求するのは当う余裕がまだ日本の企業にはないんですよ。つまり自己の主張を、目前の利害に捉われずはっきりさせるということです。――戦後七十年が経過しましたが、戦いうことです。――戦後七十年が経過しましたが、戦の相談相手だった白洲次郎の持論に「財界人といわずできだ」(『プリンシプルのあった人」から)というのがあり、さだ」(『プリンシプルのあった人」から)というのがあり、さだ」(『プリンシプルのあった人」から)というのがあり、されている。

ます。

澁澤 それでは最後に、次代に伝えるべき提言をいた

澁澤 ことを希望します。禁断の木の実を食べた人間は、死 応の対社会的な道徳観念が必要なのだろうと思います。 ぬまで知の木の実を食べ続けなくてはならな スマートで和顔愛語をまとった人間に育っていかれる たことはないのであって、 りません。目的はお金だけなどという、そんな馬鹿げ っては、しっかり、物を作る、という実業の目標があ ール・ヘッド・アンド・ウォーム・ハー いわゆるバランスです。願わくば次世代の若者達がク 私のような銀行員という虚業に携わ ありがとうございました。 お金を稼ぐのであれば、相 トを持ちかつ った者にと いのです。

(いまづ しんさく/しぶさわ けん)

[二〇一七年六月十九日収録]